

東日本大震災により被災した小さな町の再生とその役割 ー石巻市雄勝地区を対象としてー

東北工業大学 正会員 ○菅原 玲
東北工業大学 フェロー 今西 肇

1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災から丸2年が経過する今、生活者レベルにおいて復興という実感を持つことは難しく未だに希望を抱ける状況ではない。このような状況下において、東日本大震災の被災地に存在する小さい町の多くは、つねに将来への不安と隣り合わせにあると言える。そのことから、本報告では「雄勝」という町を対象に、小さな町に内在するだろう豊かで価値ある未来創造の可能性を検討することとする。このことは同時に都市が抱える様々な問題（たとえば科学技術と人間の営みのバランスが崩壊していることやエネルギーの問題）に対し、「新しい生き方、豊かな暮らしの提案」につながるのではないかと考える。

2. “小さな町” 雄勝の現状と課題

雄勝の歴史は古い。はるか縄文の時代より人々はこの地で生活を営んできた。そして現代にも繋がる「硯」については、すでに室町時代の文献に雄勝石が登場している（大浜千葉氏伝承の古文書より「ヲカチすゝりハマ小アミ（雄勝硯浜）」の記述あり¹⁾）。その後近世に入り伊達藩がこの地を領する頃になると、雄勝の硯師は伊達家お抱えとなり、硯石材の産出山は「お留め山」とされ一般の採掘が許されなかったほどである。また、伊達政宗が建造を命じたサン・ファン・パウティスタ号に関する建造の旨が雄勝町の古文書（「雄勝風土記抜書」¹⁾）に記されており、この地における伊達藩の政策²⁾の関わりが読み取れる。簡単に振り返っただけでも雄勝という地域の歴史・文化の奥深さをうかがい知ることができる。そして明治から昭和まで、雄勝は主に一次産業である漁業と山からの資源である「石」（硯やスレート）の産出という両輪で今日にまで至ったと言える。

2011年3月11日、町は巨大津波に飲み込まれ8割を超える地区が浸水した。住居建物はその多くが流され、破壊された。町の中心やメインストリート沿いの建物は跡形もなく壊滅し、現在では瓦礫もかたづけられ、草が土台を覆う状況である（写真-1）。雄勝はその独特の地形から、復興構想の遅れが懸念されている。雄勝は石巻市の東端に位置し、町内の8割を山間部が占めている。雄勝湾は狭く小指の様に半島の付け根に入り込んでおり、海岸線からすぐに山裾へ至り、平地は少ない。このような地形条件のため、津波の到達点は高いところでは20mを超え、建物の3階部分までも海水が到達した。復興構想の遅れに追い打ちをかけているのは激しい人口流出であり、減少率は70%を超えている。4300人の人口は2012年の段階で1300人に減少、公共施設等の被害も甚大で雄勝総合支所、公民館、小中学校（5校のうち3校全壊、生徒児童数も大幅に減少（表-2）³⁾）、市立雄勝病院、などの公共施設、雄勝硯伝統産業会館などが壊滅した³⁾。町の再生は深刻な問題である。



写真-1 雄勝中心部の現状（2012年秋 撮影）

<小学校>														
学校名	1年		2年		3年		4年		5年		6年		特別	
	122	121	122	121	122	121	122	121	122	121	122	121	122	121
雄勝小学校	12	3	21	5	17	3	19	10	13	8	25	9	1	1
船越小学校	1	0	3	1	4	1	2	2	5	3	7	3	0	0
大須小学校	1	1	2	1	2	3	0	2	3	4	5	1	0	0
<中学校>														
学校名	1年		2年		3年		特別		合計					
	122	121	122	121	122	121	122	121	122	121				
雄勝中学校	20	10	27	16	29	16	4	0	80	42				
大須中学校	3	3	8	8	9	3	0	0	20	14				

表-2 生徒数推移（2012年石巻市）³⁾

いずれも住民の生活には欠かせない日常を支える存在のものであり、特に病院・役場・学校等の崩壊は人々の生活を直撃している。（現在、雄勝地区には公共の病院レベルの医療機関は無いが診療所という形で医師が通いながら医療業務にあたっている³⁾）。

3. 小さな町の再生とその可能性

雄勝地区の復興の遅れは、独特な地形にそぐわない行政判断が一因でもある。旧生活区（メインストリート境界を含む）のほぼ全域が居住禁止区域とされ、住居の建設や道路の建設が従来の位置では不可能となり、示された移転地区だけでは残された雄勝の人々の居住をまかなえる個数に至っていないなどの矛盾が発生している。雄勝の場合「生活者視点・生産者視点」で「住む町」を考えた時、再建プランや将来への夢や希望は描くことが難しいのが実像であり「戻りたい」という意志が尊重されにくい復興計画とも言える。再建方法とし6割近い人が町外という意向もある中³⁾、人口減少や労働者人口の減少、雇用の減少、子供数の減少から見ても町の再生意義を見いだすのは非常に苦しい状況でもある。

このような状況下で小さな町である雄勝地区が再生するためにはどうするべきか（行政との合意形成は今後の課題ではあるが）、必要な条件として、第一に人間生活の根底である「生きる意味（あるいは価値）」にまで思いを寄せる必要性に触れておきたい。小さな町は何を以てその存続意義を示すべきか。ここで立ち返りたいことは、「そこに生きる人間の生」の価値をどこに置くかという基本的視点であり、この点を重要視できるか否かが「暮らしの再生」の鍵になると考える。小さい町であっても人が生きるに十分な存在理由があること、生きる価値を見いだせるコミュニティであること、仕事を持つこと、その社会の継続が可能な条件がそろっていること、言い換えれば人間が生きている限り行わなければならない行動（仕事、日々の営み）の中に、どれだけ「充足（満たされるという思い）」というキーワードを持てるかどうかという事が重要になる。雄勝という小さいまちには制約が多い。不便さ、流通の問題、自然の問題等がある。しかしそのような制約を受け入れながら現代の科学技術を利用することで、災害の危機を乗り越え、不便さを多少解消し、自然から恵みを受け、さらにその恩恵＝資源から新しいモノづくりの提案ができる、という可能性も持っているのである。

以上のことから、雄勝地区を例にとり、小さな町の再生のため「雄勝地区が持てる可能性」を以下にあげる。

- (1) 資源を持った地区である…硯やスレートの加工品（玄昌石の採石）、一次産業からの恵みが豊富である
- (2) 受け継がれる技がある…技は年齢とともに熟練する、体力や若さだけではない知恵が活かされる仕事が多い
（主に一次産業や硯生産などの伝統産業やスレート産業など）
- (3) 伝統ある資源（＝文化）と豊かな自然がある…世界に誇れる伝統と歴史を保有、子供達への文化教育が可能
- (4) 特色ある産業＝雄勝石産業の振興を行う事で、文化面、観光面、教育面、広域地域連携が可能
（具体的には書文化を通じた地域活性、体験学習、体験ツアー、スレート産出国（ドイツ、スペイン他）や共通する硯や書の文化を持つ中国との文化交流が可能）
- (5) 一次産業の活性化（食文化発信が可能であると同時に、災害時の食料補給基地構想が可能）
- (6) 隣人との距離が身近である＝助け合いが可能

4. おわりに

エネルギー問題や環境の悪化が懸念される現代において、都市文明のもろさは3.11に露見した。その中で小さな町の再生は、未来の人間の営みにとっての「豊かな暮らしや幸福の形」の一例を示す可能性を持つと言えるだろう。

豊かさの原理を「便利や技術」に力点を置くのではなく、暮らしに制約があっても「満たされること＝充足や自己成長」に価値を置く暮らしへのシフト転換はこの先求められる都市生活の重要な要素でもある。小さな町の特色を十分に生かし、適材適所に科学技術の応用を行う事で、制約をのりこえ、心ゆたかな暮らしを創造することが出来れば、小さな町の再生には大きな価値が生まれると言える。昔の暮らしを懐かしむということではなく、未来に豊かな生き方の提案を投げかけるものとして、小さな町の再生を捉えることができるだろう。復興の過程で未来につながる持続可能な仕組みの構築をめざすためにも、小さな町が果たす再生の役割は重要であると言える。

参考文献

- 1) 雄勝町史編纂委員会/編：雄勝町史 1966年，pp106-107，pp268-297
- 2) 菅原 玲、今西肇、山内淑人「伊達藩の政策から震災復興を考える」，土木学会平成24年度年次学術講演会，2012年9月
- 3) 石巻市雄勝町総合支所復興事業報告，2012年
・山下祐介：限界集落の真実―過疎の村は消えるか？，筑摩書房 2012年，pp20-40，pp99-102，pp104-142